

日本女子大学 総合研究所 ニュース

25



日本女子大学総合研究所
平成26年3月

日本女子大学総合研究所ニュース

No.25 (2014.3)

目 次

巻頭言「一つの研究課題に向かって」	……………	所長 三神和子	… 1
I 第17総合研究所研究発表会			
挨拶	……………	学長 佐藤和人	… 5
研究課題48 日本のきものが欧米の服飾に与えた影響			
……………	……………	研究代表者 佐々井啓	… 6
研究課題50 開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発 ～日本の支援の可能性を探る～			
……………	……………	研究代表者 天野晴子	…14
研究課題52 日本女子大学の国際的リーダー育成の可能性を探る			
……………	……………	研究代表者 北島歩美	…20
研究課題54 大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み			
……………	……………	研究代表者 飯長喜一郎	…31
閉会挨拶	……………	所長 三神和子	…37
II 2013年度総合研究所活動報告／2013年度研究課題・研究員一覧	……………		38
III 2014年度研究課題	……………		43
IV 2014年度『日本女子大学叢書』採択報告	……………		49
V 日本女子大学総合研究所規則	……………		50
VI 日本女子大学総合研究所研究内規	……………		53
VII 日本女子大学総合研究所研究センター認定内規	……………		56
VIII 2015年度総合研究『日本女子大学叢書』応募規程	……………		57
IX 2013年度総合研究所組織	……………		59

装幀：後藤 久

一つの研究課題に向かって

所長 三 神 和 子

今年度も『日本女子大学総合研究所ニュース』を全学園の教員・職員にお届けできますことを嬉しく存じます。今年度も各共同研究は着実に進展し、研究発表会も盛況のうちに開催されました。各協同研究は研究課題 48「日本のきものが欧米の服飾に与えた影響—19 世紀後半から 20 世紀前半を中心に」、研究課題 49「西生田キャンパスの森の再生」、研究課題 50「開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発」、研究課題 51「平和を希求する社会貢献活動を一貫教育を通じて支援する組織作りの提言に向けての研究」、研究課題 52「平和な国際社会のリーダーを育成する自己実現支援体制と学園アイデンティティの確立」、研究課題 53「教職志望学生、教職に就いている卒業生に対する力量向上に向けた支援実践」、研究課題 54「大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み」、研究課題 55「家庭福祉センター『みどりの家』の歴史的考察と地域貢献の意義」、研究課題 56「日本女子大学における『放課後サポート』実施に向けての調査・研究」の計 9 件が着実に研究を進めております。メンバーは幼稚園教諭、附属小学校、中学校、高等学校の教員、各学部の大学教員、カウンセリングセンター等の附属機関、学園全体から広く集まり、一つの研究課題に向かって互いに協力し合っております。

研究発表会は 2013 年 12 月 7 日（土）に開催され、佐藤和入学長の挨拶のあと、研究 2 年目を迎える研究課題 48、50、52、54、の計 4 研究チームが発表いたしました。よく準備された解りやすい発表の後、質疑応答が活発に取り交わされ、予定の時間を大きく超過するほどの熱心で刺激に満ちた研究発表会となりました。

学園の構成メンバーがただの親睦ではなく、一つの課題に向かって意見交換し、互いに協力し合えるこのような機関があることを幸せに感ぜずにはられません。ますます、総合研究所が発展できますよう、努力するつもりでございます。

最後になりましたが、今年度も日本女子大学叢書が 1 点刊行いたします。著者の馬場哲雄教授は 2013 年 5 月に急逝されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。また、馬場先生の原稿の整備、校正等、原稿を刊行する形に至るまでご尽力くださいました猪狩眞弓先生をはじめ、総合研究所の橋本のぞみさん、郡真木子さん、鴨川都美さんに感謝いたします。

I 第 17 回総合研究所研究発表会

2013 年度総合研究所研究発表会が、12 月 7 日（土）に百年館 2 階教室で開催された。第 17 回目となる今回の発表会では、研究が 2 期目に入った 4 つのグループが発表を行った。

以下は、当日の研究発表会のプログラムである。

日時：2013 年 12 月 7 日（土） 午後 1 時 30 分～午後 5 時

場所：百年館低層棟 2 階 207 教室

司会：総合研究所所長 三神和子

13 : 30	開会挨拶 学長 佐藤 和人
13 : 40 ~ 14 : 20	【研究課題 48】日本のきものが欧米の服飾に与えた影響 —19 世紀後半から 20 世紀前半中心に（代表：佐々井 啓） テーマ：日本のきものが欧米の服飾に与えた影響 —フランス、イギリス、アメリカの事例から 発表者：全体のまとめ 佐々井 啓（被服学科） 1. フランス 滝澤 愛（相山女学園大学） 佐藤 恭子（人間生活学研究科生活環境学専攻 3 年） 2. イギリス 米今 由希子（被服学科非常勤講師・本学学術研究員） 3. アメリカ 太田 茜（被服学科非常勤助手） 4. 日本 森 理恵（被服学科）
14 : 20 ~ 15 : 00	【研究課題 50】開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発 (代表：天野 晴子) テーマ：開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発 ～日本の支援の可能性を探る～ 発表者：天野 晴子（家政経済学科） 飯田 文子（食物学科） 高増 雅子（家政経済学科）
15 : 10 ~ 15 : 50	【研究課題 52】平和な国際社会のリーダーを育成する自己実現支援体制と 学園アイデンティティの確立 (代表：北島 歩美) テーマ：日本女子大学の国際的リーダー育成の可能性を探る 発表者：北島 歩美（目白カウンセリングセンター） 鶴養 美昭（心理学科）
15 : 50 ~ 16 : 30	【研究課題 54】大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み （代表：飯長 喜一郎） テーマ①：課題発見から地域活動へ—寺尾台団地を事例として 発表者①：黒岩 亮子（社会福祉学科） テーマ②：小大連携による環境教育研究の取り組み —狛江市立小学校との研究協力 生物多様性の理解 発表者②：加藤 美由紀（教育学科） 田部 俊充（教育学科） テーマ③：学生による地域連携活動とプロジェクト型演習 —チーム活動と情報技術教育— 発表者③：星名 由美（心理学科） 久東 光代（心理学科）
16 : 30	閉会挨拶 所長 三神 和子

挨拶

学長 佐藤 和人



皆さん、こんにちは。これから総合研究所の第17回目の発表会を開会します。まず参加者の皆様にお礼を申し上げます。総合研究所の取組みは、非常にユニークなものであり、日本女子大学の特徴がよく現れている研究所ではないかと思います。私も初期の頃に、一貫健康教育ということで研究所の課題に応募させていただいたことがありました。日本女子大学というのは色々な軸があるように感じています。その軸が例えば、ナースリー、豊明幼稚園から大学、大学院、さらに卒業生、桜楓会の先輩方に至るまでの縦の軸が一つあります。大学としては総合大学であり、学問領域の幅広い横の軸があって、何よりも成瀬先生が始められた時から現在までという歴史の軸があって、我々が拠って立つことができる軸が縦横無尽に張り巡らされています。また、日本女子大学でおこなっている教育・研究のテーマは、地域のことから日本全体のこと、あるいは国際的なことまで非常にフィールドが広く、色々な軸の存在がその可能性を広げていると感じています。

本日の発表演題を見せていただくと、地域に密接した研究があり、あるいはそれを広げて日本から発信し、外国にどんな影響を与えているかという発表であったり、実際に外国へ出かけて行って教材とか支援することにはどんなことがあるか、あるいは出て行くリーダーを育てるためにはどうしたらよいか、国際的リーダーの資質はどのようなものかというふうに、フィールドが色々な分野に広がっています。一貫教育から生涯教育という軸、学問領域の多様さ、成瀬先生からの歴史の軸に加えて、フィールドの多様さに表れているように、総合研究所というのは非常にポテンシャルの高いところだと思っています。今、大学は発信を求められています。総合研究所もちゃんとアピールしないと、自分たちはいいことをやっていると思っても、そこを周りの人たち、あるいは社会の人たち、日本のみならず世界の人たちが認識できない。認識してもらわないと、価値が減ってしまうということではないでしょうか。発信していける総合研究所の研究であってほしいと思っています。今日のお話を伺うのを楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

研究課題 48

日本のきものが欧米の服飾に与えた影響

日本のきものが欧米の服飾に与えた影響

ーフランス、イギリス、アメリカの事例から

発表要旨

1. はじめに



佐々井 啓 (被服学科教授)

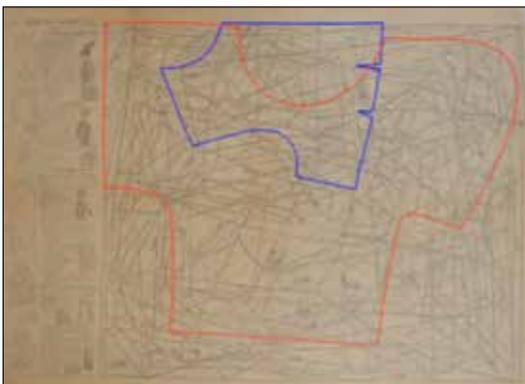
本研究は、これまで個別に行ってきた「日本のきものが欧米に与えた影響」について、共通のテーマを設定して成果を挙げることを目的としている。イギリス、フランス、アメリカにおける服飾造形に日本のきものデザインがどのように影響を与えているのか、という視点から、フランスの人体計測を基にして欧米の衣服の型紙設計法を検証する。次いできもの服飾遺品のみでなく、中流階級に普及した具体的かつ実用的な服飾についての研究を行っている。さらに、日本のきものがどのように

海外で受容されたのかという点も検討する。

2. フランスのボディとパターンメイキング 滝澤 愛 (椋山女学園大学専任講師)



フランスにおいて、立体裁断による衣服のパターンメイキングの土台になってきたのが人体を模ったボディである。ボディは時代毎の女性の人体形状を色濃く映し出している。そこで、先ず19世紀末から20世紀前半にかけてのボディの形状とサイズ展開の調査をボディ会社のカタログを中心に行った。それに加えて当時のモード誌の中で実用的志向が高い、実寸大パターン付録付きの婦人ファッション誌『ラ・モード・プラティック』を資料に選定し、パターンやオーダーに関連した記事と併せて



度々掲載されているサイズ表の調査をした。そして時代毎のサイズ展開とサイズ毎のバスト、ウエスト、ヒップ寸法の推移を追い、ウエストに対するヒップ、バストの比率の分析を行った。その様にして衣服の型紙設計の基準となる女性のボディを分析した上で、次に付録パターンの型紙の調査をした。収集できた1491点のパター

図1 『ラ・モード・プラティック』1910年9月3日号付録パターンのカッティング分析例

ンの中から、きもの要素を取り入れたデザインやシルエットの型紙を抽出してカッティングの分析をし、型紙中に表れている日本のきものが影響していると考えられるカッティングを検証した。

3. フランスのキモノデザイン

佐藤 恭子 (本学大学院生)



芸術におけるジャポニズムが日本のモチーフの引用など、単なる模倣のジャポネズリから西欧的な応用により、日本美術の影響を受けたひとつのムーヴメントとして成立していったように、きものデザインは、フランスモードの世界で19世紀末から20世紀頭という短期間に様相を変えていつている。

キモノは当初、仮装衣装や室内着という形でフランスの婦人服に登場した。当時の婦人雑誌の中で、日本を紹介する記事にならんで、キモノを着たフランス人女性や室内着としてのキモノの広告などが見られる。その後、キモノのカッティングやデザインから着想を得たクチュリエによるスタイルが登場し始め、キモノ袖、おひきずり、帯ベルトなどのスタイルが登場する。クチュリエ等がキモノデザインに関心を持った理由には、このころのドレスシルエットの変化との関係があげられる。長年続いてきた西欧の伝統的なドレスが、コルセットをとまなう身体に密着していたのに対し、このころになると身体の解放とゆとりを持つ諸外国の影響を受けた平面的カッティングのドレスが出現しはじめる。この流れは日本を含めた異国趣味の流行を作り出し、キモノデザインもまた多くデザインに活用されていったと考えられる。これらの活動的なドレスやきものデザインは、中流階級向け雑誌の中でもしばしば見られ、その流行は日常的におしゃれを楽しんだ上流階級にとどまっていたとはいえない。また、雑誌だけでなく、当時のモード参考書の一つでもあった百貨店のカタログにも見られるようになり、次第に婦人服のひとつのデザインとして浸透していったと言える。



図2 『リリュストラシオン』 1889年11月30日
「舞踏会の仮装ドレス」



図3 『フェミナ』 1903年4月11日
室内着の広告「キモノ サダヤッコ」

4. イギリスの日本趣味と演劇にみる「きもの」 米 今 由希子（被服学科非常勤講師）



19世紀後半のイギリスにおいて、日本の文化が紹介され、さまざまな日本の物品がもたらされることによって日本趣味が形成されていくが、1885年1月にロンドンのナイツブリッジに開設された「日本人村」では、直接日本の工芸技術や風俗習慣に触れることとなった。さらに、同年3月には、日本をテーマとした演劇『ミカド』が上演され、日本趣味がいっそう広まったのである。

そこで、当時の新聞や雑誌、写真を資料として、「日本人村」がどのように紹介され、日本の文化がどのように人々の目に触れたのかを考察し、さらに『ミカド』の初演時の衣裳の実態を明らかにすることによって、19世紀のイギリスの演劇において日本の服飾がどのように用いられていたのかを考察した。

1885年2月21日の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』には「日本人村」について挿絵入りの記事が掲載されている。挿絵は日本人村の街角の様子や茶屋の様子など、9箇所のスケッチが載せられており、記事は興行がとても成功していることを述べている。

また、1885年4月4日には一面の挿絵入りで『ミカド』についての記事が掲載されている。挿絵には中央に大きく三人娘が描かれ周囲にその他の登場人物が延べ10名描かれている。また、ビクトリア・アルバート美術館に保存されている写真からも、初演時の衣裳が考察できた。

その結果、「日本人村」で実際の日本文化に触れることによって、より正しい日本文化への理解が高まったことが分かった。また『ミカド』は日本を舞台として日本の出来事をテーマとしているため、いくつかの階級の日本の衣裳が用いられていた。それらは実在の衣裳のアレンジではあるが、日本の実際の文化をさまざまな形で取り入れたものであるといえる。



図4『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』
1885年2月21日「日本人村」



図5『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』
1885年4月4日「ミカド」

5. アメリカ

太田 茜 (学術研究員)



アメリカにおいてキモノは Kimono もしくは Japanese Wrap という名称で紹介されており、主にガウン等の部屋着として用いられていた。日本の文化や服飾についての情報は日本から直接もたらされるものと、フランスやイギリスからジャポニスムという形でもたらされるものがあり、キモノの元々の形状や着装の仕方を理解した上でアレンジをした Kimono は日本のキモノとは別のものである

という認識がされている。

当時発行されている雑誌には、日本のキモノについての解説や仮装パーティで日本のキモノを着ている姿が掲載されている。また、数回行われた万博の日本館の様子からもアメリカにおいて日本のキモノの着装した姿を知る機会が少なくなかったことが窺える。アメリカの博物館・美術館に所蔵されているキモノは日本でつくられたものがほとんどであり、輸出用につくられたものの一部に背縫いがない、まちが加えられている等の違いはあるものの従来のキモノのイメージからは大きくは離れないものになっている。

一方 Kimono はアレンジが様々にされたものであり、通信販売のカタログでは素材や着丈の違う Kimono が様々に売られている。また、Paris' Kimono という形で紹介されている記事も多く、パリの最新ファッションの一部として Kimono をとらえている。

このようにアメリカにおけるキモノの認知度は高く、またお洒落な室内着として様々な Kimono が考えだされ、着られていることが明らかとなった。



図6 シアーズ・ローバック社カタログ Kimono の広告

6. 欧米における「きもの」の受容

森 理 恵 (被服学科准教授)

(1) 欧米における「きもの」観

欧米における「きもの」観は、19世紀末の「ジャポニスム」に強く規定されている。「蝶々夫人」やピエール・ロチ「お菊さん」のイメージである。ジャポニスムのなかで、「日本」そのものが女性化されると同時に、「きもの」もまた女性化されることとなった。日本では女性と男性双方が着用していた「きもの」は欧米では女性の衣服であると考えられたのである。

ジャポニスムはオリエンタリズムの一種であるから、「日本」には、欧米で主流の人々（白人中産階級男性）の欲望が投影された。すなわち彼らは、「日本」には欧米にはない、または既に失われてしまった素晴らしいものがまだ残っていると夢想したのである。彼らが夢想した「日本」は、

自然に対する優れた美意識や感受性を持つと同時に性的モラルがなく、彼らが夢想した「日本の女性」は、美しく従順であると同時に性的に放縦であるというものだった¹⁾。

そのような「日本の女性」は「ゲイシャ」というイメージに集約され²⁾、そのゲイシャの衣裳が「キモノ」である。したがってゲイシャやキモノにはエロティックな連想が結びつき、キモノやキモノ型の衣服は寝室のガウンとしても使われることになった。欧米のゲイシャが日本の芸者と同じではないように、欧米のキモノも日本の「きもの」とイコールではない。

ただし Corwin は、ヨーロッパでキモノが性的な連想と結びつきやすかったのに対し、北米ではまた別の異なるイメージがもたれていたことを指摘している³⁾。すなわち、家庭の守護者としての貞淑な女性像や、のちには女性解放のイメージまでもが、北米ではキモノを着た女性を描いた絵画に表現されたと言う。

いずれにせよ、欧米のキモノは、欧米の人々がその欲望を自由に投影することのできるエキゾチックな衣服であり、日本で人々が実際に着ている「きもの」とは必ずしも関係しないのである。

(2) 欧米の博物館の「きもの」収蔵状況

欧米の美術館博物館に「きもの」が収蔵された経緯を調べると、だいたい次のように分類できる⁴⁾。

① ジャポニスム関連

- ・ 19世紀末～20世紀初めの日本ブーム（ジャポニスム）の風潮のなかで、日本に来た欧米人が持ち帰ったもの
- ・ 上記の風潮をうけて、貿易商・古美術商より購入したもの
- ・ 19世紀末～20世紀初めの万国博覧会に出品されたもの

② 日系人・在外日本人関連

- ・ 19世紀末以降の日系移民により寄贈されたもの
- ・ 欧米在住の日本人により寄贈されたもの

③ 連合軍占領関連

- ・ アジア太平洋戦争後の連合軍占領期に日本に滞在した欧米人が持ち帰ったもの

④ 近年のキモノブーム関連

- ・ 20世紀末～21世紀初めの、主に北米におけるキモノブームの風潮のなかで、古着商等より購入したもの
- ・ 上記の風潮のなかで、日本の商社、作家等より購入または寄贈されたもの

⑤ その他

これら①～⑤のいずれにおいても、日本の国内で消費されているのと同様の「きもの」と、輸出入や土産用として欧米での需要にあわせて作られた「きもの」との2種類がみられる。後者のなかには室内ガウンやイブニングドレスとして使用できるように、脇に襷を入れてスカート部が広がるようにしたもの、帯のかわりにリボンをとりつけたもの、など様々なデザインが見られる。

また、欧米の博物館には、19世紀末の博覧会出品品や近年の人間国宝作品のように「美術品」とみなされるようなものから、日本の博物館であればあまり収蔵されないような質素な衣服や下着類、仕立て直し品まで、幅広く収蔵されていることが特徴であると言える。

さらに、④の近年の欧米におけるキモノブームは、日本における古着のキモノブームに先行したと言われており、大正～昭和初期の「きもの」全盛期の品物を収集するキモノコレクターが北米には数多く存在することが知られている。こうしたキモノブームと、アニメなど日本のポピュラーカルチャーの人気との関連も興味深いところである。

(3) まとめ

日本の「きもの」に影響を受けた欧米の服飾を「洋服ではない」と言う人はいないであろう。また、それらを「ニセモノの洋服だ」と言う人もいないであろう。同様に、輸出用にデザインされた「きもの」や外国でデザインされた「きもの」を「本来のきものではない」と考える必要もない。

19世紀以降、「きもの」は出自を日本に持ちながらも、アジアや欧米で生産され、流通し、消費されてきた。とくに近年は、多くの「きもの」が日本国外の工場で作られているし、「きもの」のコレクターや、パーティなどで「きもの」を着る人は世界の各地に存在している。それぞれの地域で、さまざまな「きもの」観がある。今後は、「きもの」文化を日本の国内や欧米に限ることなく、広い視野でとらえ、考えていかなければならない。

注

- 1) Nancy A. Corwin, "The Kimono Mind: Japonisme in American Culture," Rebecca A. T. Stevens and Yoshiko Iwamoto Wada, eds. *The Kimono Inspiration: Art and Art-to-wear in America* (Washington, D. C.: The Textile Museum, 1996), 23-27.
- 2) オリエンタリズムとオクシデンタリズムの構造における「ゲイシャ」については佐伯順子「『ゲイシャ』の発見」(島本浣・加須屋誠編『美術史と他者』、晃洋書房、2000年、119～152ページ)参照。
- 3) Corwin, 45-53.
- 4) 筆者は、2009年～2011年に米国のボストン美術館、メトロポリタン美術館、ブルックリン美術館、英国のヴィクトリア&アルバート美術館、大英博物館の「きもの」に関する収蔵品を調査した。また、そのほかの欧米主要博物館の「きもの」収蔵品についてはオンラインの収蔵品データベースで概観した。

質疑応答

Q 1：最初のご発表のところで、「ウエストの強調」というのがあったのですが、なぜウエストを強調したかということの背景の思想などをお教えいただきたいと思います。

A 1：「ウエストの強調」ですけれども、私は構成学の見地からずっとやっているのですが、そういう歴史的な背景は他の先生方が詳しいと思うのですが、ただ長い間ヨーロッパの衣服の着装として、ウエストを細く締め上げているというふうな歴史がありまして、そういったものもいろんな1900年代初頭のジャポニズムの影響から解放されていったという背景があります。ただ、なぜコルセットを着用していったかというご質問に関しては……。

Q 2：当時、19世紀末あたりから盛んになり、20世紀にも世界に渦巻きました社会ダーウィニズムとの関係だと思うのですが、いかがでしょうか。

A 2：色々関係があるとは思いますが、16世紀からコルセットを、女性はつまり美しくあるためにはウエストは細く豊満なという歴史の中で、19世紀後半からの社会思想とかジェンダーとか参政権運動とか、女子の高等教育とかそういう流れがあって、徐々に女性のみが男性のためにということは思想的な面からもずいぶん変わってきたと思います。それと、もう一つ今の研究の中で、欧米ではないものが、たぶん日本の浮世絵とか日本趣味が盛んになりますので、そういう所で、私たち服飾の観点からいえば、やはりきもの直線的なカッティング、なおかつ逆にエロティックで美しかったりするという事で、全く違う服装というものが別の美を生み出すのだというあたりが、その当時の流れと、一方ではもちろん思想的な女性解放とさまざまなものが一緒になったのかなと思っておりますけれども、またよろしくお願いします。

Q 2：ありがとうございます。イギリスでは、ウエストを締め上げることは性的モラルの象徴ですか、運動の中ですよ、けれどもそれに対して西洋のものも今のご説明でよく分かったのですが、日本からのものだと性的には少し解放されているということで説明がつくと思いました。社会ダーウィニズムの所は人間と動物の差をどんどん開いていくということで、猿はウエストがないそうでそれに比べて、人間は猿とは違うことを強調することを特に女性に強いたということをね、面白い発表だと思いました。

Q 3：二番目の方のところで、初めはきものが仮装パーティみたいなので、とても面白いなと思ったのですが、次に室内着になっていきますが、室内として流行っていく背景は何かあるのでしょうか。

A 3 : 先ほどのウエストの話ともつながるのですが、ゆとりを持っている平面的な、従来西洋の洋服という身体に合ったドレスという縫製の仕方をしていくのですけれども、きものように平面の直線的なものは、あちらの人にとっては新しいものだったと思うのですが、その衣服をまとうことでゆとりを生み出し、それを室内着として着やすいということを用いたのではないかと思います。

Q 4 : ありがとうございます。室内でも物がしっかり見れる状況が整ったということもあると思うんですね、例えば、明かりとか暖房とか、そして家の中にいるファッションを他人に見せることも価値あることだと考えるような環境も整ってきたということで、いつもよりも素敵に、ということになるのではないかなあというふうに思ったのですが、いかがでしょうか。

A 4 : 室内着につきましては、私はアメリカなのでフランスのことはよく分からないのですが、イギリスやアメリカですと、外に出かけるときの服はコルセットを締めてスカートを何枚も重ね履きしてという決まりが非常にはっきりしておりますので、室内にいるときはくつろいでいたり、家族でご飯を食べるときですとか、親しい友達を呼んだりというときは、そのルールからはちょっと外れてきれいな服を着たいというのがどうもあるようで、その中にきものというのは元々の洋服のルールから外れてしまうのですけれども、室内だったら着てもいい、という形でガウンとしてよく着られていたような感じが当時の小説などからは読み取れます。

Q 4 : ありがとうございます。とても面白いと思います。

Q 5 : こういう日本のきものは大変な文化遺産だと思うのですけれども、世界遺産への動きはないのでしょうか。そもそも衣服が世界遺産になるかどうかとも分からないのですが。

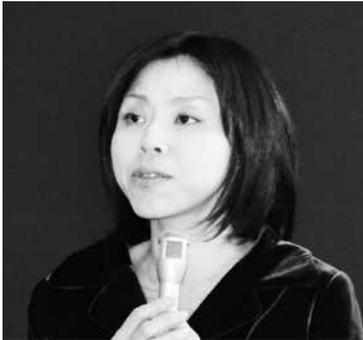
A 5 : 私どもではわかりかねるのですが、世界遺産関連のニュースを見ていると食はやっぱり今回も和食が世界遺産になりましたけど、服自体の文化遺産というのはちょっと聞いたことがないので、そういう発想がそもそもないのかもしれないですし、これからやっていった方がいいかもしれないですね。ありがとうございます。

研究課題 54

大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み

その① 課題発見から地域活動へ―寺尾台団地を事例として

黒岩 亮子 (社会福祉学科専任講師)



1. 本活動の位置づけと目的

本活動は平成 25 年度多摩区三大学地域課題解決事業「寺尾台団地における高齢者への生活支援～住・食・交～」として昨年度から継続している活動である。寺尾台団地（1970 年開発・分譲、412 戸）は、高度成長期に開発された団地の一つで、建物の老朽化や空き家の増加など団地独自の課題にくわえ、高齢化の進展、孤独死など様々な課題があることが推測された。そこで昨年度、黒岩ゼミ（地域福祉ゼミ）を主体として、寺尾台団地における日常生活における課題、とくに住居（住）や買い物（食）における課題や、地域関係・地域活動の実態と課題（交）を主とするアンケート調査を実施した。2年目となる今年度は、それらから明らかになった寺尾台団地における地域課題について、地域住民、とくに寺尾台住宅管理組合と協働して、その課題解決ための提案、実際の活動などを行うことを目的とした。

2. 今年度の活動内容

- ・地域住民へのヒアリング（4名）
- ・寺尾台団地見学および寺尾台住宅管理組合理事会の皆さんとの話し合い（学生2回＋教員2回）
- ・寺尾台団地における活動の見学
- ①子ども会（夏祭り等）②自主保育たんぽぽ園③自由の会（高齢者サロン）④多摩区みんなの公園体操
- ・先進事例の見学
- ①港区＋慶應義塾大学「芝の家」「三田の家」②横浜市栄区UR公田町団地「NPO法人お互い様ネット」
- ・理事会主催イベントへの参加（防災訓練・お花見等）
- ・多世代交流型イベントの実施（コミュニティカフェ（10月16日）ハロウィン（10月31日））

3. アンケート、ヒアリングおよび話し合いから抽出された課題

アンケートの回答者の属性が高齢者に偏ってしまっていたために見えなかった、子育て世帯が増加しており小学生を対象とした子ども会活動が活発化していることが大きな発見であった。また、民生委員が自由の会を開始するなど様々な活動が実は行われていたが、自治会組織ではないということもあり理事会役員もそれを把握していなかった。すなわち、地域でこうした活動を共有できて

いないこと、また世代を超えた交流がほとんど行われていなかったことが明らかになった。また、理事会主催の防災訓練など関心がある活動には地域住民が参加していることも明らかとなり、多世代交流型イベントをヨソモノである大学生が行うことで、地域が活発化するのではないかとイベント実施をするに至った。

4. 他世代交流型イベントを実施して

コミュニティカフェには子ども 30 名、親 10 名、年配の女性 10 名、男性（理事会役員等）5 名程度の参加があった。とくに子どもは地域のイベントへのハードルが低く、その子どもたちが仮装をして団地の 5 つのスポットを周るハロウィンパレードへはさらに親も含む 70 名近くの参加があった。スポットでは年配の女性など 15 名程度がお菓子配付に協力してくれた。その後のパーティーは人数があまりに多く子どものみのイベントとなってしまった。しかし、仮装を自宅から見してくれた人も多く、こうした参加も重要であると考え。一方でイベントを通しての大学生の介入を嫌う声もあった。多様な地域住民のニーズがある中で、大学生がどのような専門性を持って地域活動に関わるのか、今後の課題としたい。

その② 小大連携による環境教育研究の取組み — 狛江市立小学校との研究協力. 生物多様性の理解 —

加 藤 美由紀（教育学科助教）・田 部 俊 充（教育学科教授）

1. はじめに—小大連携の意義

西生田キャンパスではキャンパスの所在する川崎市多摩区における「多摩区・3大学連携事業」（2005年～）を中心にして、地域連携をテーマとする多様な活動を推進してきた。そのなかで教職課程の充実のための「教職実践力」を育てる方策として、「学校教育ボランティア」を展開し、学生が多摩区内の小・中学校で指導補助等の協力を行っている。2013年度は狛江市内には全6小学校（前期2年生24名、後期1年生24名）に学生を派遣している。そのプロセスで、学生を主体とした教職実践力をさらに高めるために小大連携による研究協力を依頼し、2013年度は狛江市立小



学校と環境教育活動の研究協力を行うこととなった。本発表では、狛江市立小学校との研究協力の経緯、「総合的な学習の時間」における連携の取り組みについて論じたい。

2. 小大連携による生物多様性保全教育

平成22年に開催された子どもCOP10あいち・なごや「国際子ども環境会議」では生物多様性保全に関する子どもたちの意思決定、行動参加が啓発されている。生物多様性に影響を与える要因のうち、児童の行動が影響を与えやすいのは外来種の問題である。飼育栽培している外来種が野生化した例としては、アライグマやフェレットなどのペットや外来昆虫、園芸店で売られているランタナや西洋料理の付け合せのクレソンなどが挙げられる。外来種を野外に逃げ出さないように注意を促す教育を行う必要性を粕江市立小学校の先生方にお話し、外来種についての授業と生きものマップ作成についての野外実習を行った。

授業内容については小学校の先生方とともに調整し、小学生に理解しにくい箇所を改善した。調査対象の外来植物は、7月に多摩川の河原に多く花を咲かせているハルシャギクとした。野外実習は粕江市立小学校近くの多摩川河川敷での実習のため、児童の行動への指示は小学校の先生方をお願いし、大学教員と大学生9名は外来種の名前を教えるなどのサポートにまわった。

外来種に対する授業と実習の後に質問紙調査を行った結果、在来種の食べる生きものを食べない方がよいという回答が91.5%、在来種の生活する場所を奪わない方がよいという回答が87.8%であり、外来種の在来種に対する影響を理解した児童が9割程度に至ったと考えることができる。授業後の児童の感想には、外来種を育てるときには最後まで責任をもつという意味決定につながる感想がみられた。外来種と在来種の生命に関する問題提起は小学生には難しいと懸念していたが、小学校の先生の方から各班児童の意見発表を提案された。児童にとっては、小学校の教員と大学の教員が協力して外来種に対する授業を構築するという当事者としての感覚が生じ、外来種についての理解と、外来種から在来種を保全するという行動指針を育成することができたと考えられる。

3. おわりに—小大連携による相乗効果

今回実施した小大連携の外来種に対する環境教育（生物多様性保全教育）は、大学教員による環境教育（生物多様性保全教育）の必要性の示唆及び教材開発の提案と、地域の小学校による児童の関心に即した授業構成力の相乗効果によって展開されたことを報告したい。

その③ 学生による地域連携活動とプロジェクト型演習 —チーム活動と情報技術教育—

星 名 由 美 (心理学科助教)・久 東 光 代 (心理学科准教授)

1. プロジェクト型演習科目の設立経緯

(1) SAKU LABO 設立経緯

- ・2007年から、川崎市多摩区商店街連合会の要請でエコバッグ・エコTシャツのデザイン開始
- ・2009年、有志の学生中心に、学内「特別重点化資金」助成を得て、読売ランド前駅商店街の空き



店舗をリフォームした地域交流スペース「SAKU LABO」を設立

・地域への公開ミニ講座やイベント開催、地域商店とのコラボおにぎり開発と日女祭販売など実施

(2) ボランティア活動からキャリアデザイン教育への展開

ボランティア活動では、知識・技術の体系的な指導が難しく、学生の動機づけの維持が困難なため、プロジェクト活動を進めるための体系的知識と ICT 教育を統合した、生きたキャリア

デザイン教育を目指した科目「ICT 活用とプロジェクト演習」が 2012 年度に開講された。

2. 「ICT 活用とプロジェクト演習」の目的

地域をフィールドとした商品開発やイベントの企画を通して、問題解決場面における ICT 活用能力の育成と社会人基礎力の育成を目標としている。活動を 3つの柱として捉え、Action の領域では、商品開発・イベント企画などの実践を伴うチーム活動、Presentation の領域では、印刷媒体の作成・文書作成・Web 情報発信・プレゼンテーションなどの情報発信に関する活動、Management の領域では、運営や活動の維持と管理の活動とし、学生には 3領域を意識させ、分担して作業を行うように指導した。

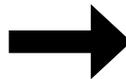


図1 ICT 活用とプロジェクト演習における 3つの柱

3. 「ICT 活用とプロジェクト演習」の指導・活動内容

プロジェクト活動の知識とICT技術の学習

- ・PMBOK、PDCAサイクル
- ・企画や商品開発の手順
(ターゲット分析、作業工程表と管理方法)
- ・ブレインストーミング、KJ法
- ・活動報告書の作成(表作成・画像加工含む)
- ・情報共有技術(ツールの比較と選択、利用法)
- ・学外・地域(多摩区役所など)からのレクチャー



チームによるプロジェクト活動へ

- ・日女祭販売会チーム(8店舗と協力した選べる米バーガーと米粉スイーツの販売)
- ・日女祭展示会チーム(店舗インタビュー含む)
- ・地域とのコラボ商品開発3チーム(2つのスイーツコラボ企画と生田緑地コラボを進行中)
- ・多摩区交流会チーム(イベントにて活動発表)

4. 授業を通じた社会人基礎力の変化

西道(2011)の尺度を用いて社会人基礎力の変化を測定したところ、4領域とも授業開始時からの変化が見られた。学生はプロジェクト型演習を体験することにより、自己の変化を認識し、すべての項目でプラス方向への変化を感じていることが明らかになった。

5. 今後の展開と課題

～持続性のある地域連携活動へ～

地域の方と学生との持続したやり取りや授業時間外活動などを含む学生指導の難しさもあるため、改善が必要である。生田緑地とのコラボ企画要請や川崎市役所・多摩区役所イベントへの参加要請など地域からの期待も大きいので、地域連携と学生の学びのバランスを考えて進めていきたい。プロジェクト型演習で学んだ学生を中心とした自主的なSAKU LABO活動へ繋げ、問題解決力を備えた地域連携を持続させる人材の育成へつなげたい。また、学内の地域連携活動をつなげるWebを作成しており、今後、さらなる充実を図りたい。

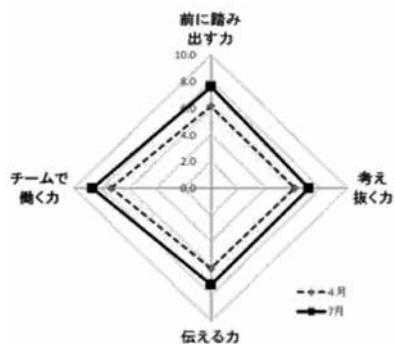


図2 社会人基礎力の変化

質疑応答

Q 1：小学校と大学の連携についてですが、大学と地元の教育、特に公立学校とが連携を取るとするのは喜ばしいことだと思いますが、教育学科でできることと、総合研究所でやることの意味、何がどのように違うのかを教えてください。

A 1：これも色々な経緯がありまして、試行錯誤を続けながら、その中で進めてきたことなので、連携協定もどのような形で進めた方がよいのか、学部として取り組んだ方がいいのか。結果的には学部として取り組んできたということがある。これから進めていこうと思っていることは、今のサクラボの活動とか、その前の寺尾台団地との活動と同じように学生が主体となるような活動に何とか昇華させていきたいと考えております。つまり、教育委員会との連携とかというと、どうしても学校側が色々注文というか、こういうことをやって下さい、こんなふうに子どもたちとの対応をお願いしますとか、お願いされることが多いが、やはりこの大学として学生たちにつけたい力というものを、こちらから発信していくと、そのために総合研究所の研究として進めていきたいと考えたのですが…。

Q 1：総合研究所は研究をしていただくのが主なので、その後で考察して、学生たちの活動を奨励するにはどのようなやり方がいいか、何か案を出していただくような方向に持って行っていただけるとありがたいと思います。

Q 2：これからの大学にとって、地域連携やボランティアが非常に大切だと思われます。違う研究をしてはおりますが、何か連携できればと思います。

A 2：本学は生涯学習センターが比較的先駆的だったと思うんです。西生田から始まって数年で目白でも展開して。多くの大学がすでに地域連携、地域貢献という枠の中に生涯学習センターが入るという形ですので、2021年には例えばラーニングコモンズみたいなものができたとして、そこで目白地区や西生田をも視野に入れた地域貢献がどう開けるかということだと思うのですが、それを待たずに小さいところからでも本学なりの組織の検討が進んでいけば、充実するのではないかなと思っています。某女子大のようにそれしか売りがないのではないかということではまずいと、日本女子大では決してそうはならないということで、強みの一つとして、女子の総合大学であるということが大きな特色になると思いますので。先生方からもご要望があれば大変ありがたいと思っております。

閉 会 挨拶

総合研究所所長 三 神 和 子



今日は時間を超過しまして、皆様はずっと参加していただき、ありがとうございました。本当に盛り沢山で、楽しい時間を過ごさせていただきました。私はやはり活発に皆さんが質問して、そしてこういう問題があるとか、それからまた、研究もこういう刺激を受けながら次につなげていこうというようなそういう機会があることは本当に嬉しいと思っています。本当に皆様、ご協力ありがとうございました。終わります。

Ⅱ 2013年度 総合研究所活動報告

- 2013年
- 4月 1日 9グループ（継続7件・新規2件）研究活動開始
- 5月 22日 第1回総合研究所運営委員会開催
2012年度決算承認
2014年度研究課題募集要項決定
- 25日 研究課題53 特別講座開催
テーマ「これからの教師像」
講師 田代雅規氏（練馬区立上石神井中学校校長）
- 6月 3日 総合研究所研究代表者会議開催
- 6日 研究課題52 部活幹部対象ワークショップ開催
学生課、学生支援調査室共催
テーマ「リーダーとメンバーにおけるコミュニケーション」
講師 鶴養美昭氏（心理学科教授）
講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 13日 2014年度総合研究所研究課題募集要項配布
第10回（2014年度）『日本女子大学叢書』刊行助成、募集開始
- 28日 研究成果報告（『日本女子大学総合研究所紀要』第16号掲載論文）提出締切
- 9月 30日 第10回（2014年度）『日本女子大学叢書』刊行助成、募集締切
- 10月 1日 2014年度総合研究所研究課題受付開始
- 7日 2014年度総合研究所研究課題受付締切
- 30日 第2回総合研究所運営委員会開催
2014年度研究課題・研究員選考
第10回『日本女子大学叢書』刊行助成、審査委員会設置
- 11月 1日 『日本女子大学総合研究所紀要』（第16号）発行
- 21日 研究課題52 寮生対象講演会開催
学生課、カウンセリングセンター共催
テーマ「コミュニケーションのしくみ～伝える、聴くについて」
講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 26日 研究課題52 研修会開催
三部門懇談会、人事課共催
テーマ「学園アイデンティティと学生支援」
講師 鶴養美昭氏（心理学科教授）
- 30日 研究課題49 観察会開催
附属豊明小学校理科研究部共催

- テーマ「西生田キャンパスの森の観察会（秋編）」
 講師 辻 誠治氏（附属豊明小学校教諭）他
- 12月 7日 第17回総合研究所研究発表会開催
 19日 研究課題52 ワークショップ開催
 学生課、学生支援調査室共催
 テーマ「コミュニケーションスキルアップのためのワークショップ」
 講師 鶴養美昭氏（心理学科教授）
 講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 28日 研究課題51 公開講演会開催
 婦人国際平和と自由連名日本支部（WILPF）、日本女子大学「平和の集い」実行委員会共催
 テーマ「平和の集い」
 第1部 生徒・学生の発表
 第2部 山田洋次監督を囲んで 本学生徒・学生による座談会
- 2014年
- 1月 7日 第10回『日本女子大学叢書』刊行助成、審査委員会開催
 9日 研究課題52 オリエンテーション委員対象ワークショップ開催
 学生課、カウンセリングセンター共催
 テーマ「リーダーとメンバーにおけるコミュニケーション」
 講師 鶴養美昭氏（心理学科教授）
 講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 15日 第3回総合研究所運営委員会開催
 2014年度当初予算承認
 第10回『日本女子大学叢書』刊行助成審査承認
- 2月 7日 研究課題52 留学予定学生へのワークショップ開催
 国際交流課、カウンセリングセンター共催
 テーマ「異文化コミュニケーション」
 講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 8日 研究課題56 公開研究会開催
 テーマ「日本女子大学における「放課後サポート」実施に向けての調査・研究」
 第1部 研究の経過報告
 講師 篠原眞澄氏（附属豊明小学校校長）
 第2部 日本女子大学における放課後サポートの意義について
 講師 池本美香氏（日本総研主任研究員）
- 12日 研究課題54 公開研究会開催
 テーマ「活動を通じて見えてきた本学の地域貢献・地域連携の課題」
- 15日 研究課題53 公開シンポジウム開催
 日本スクール・コンプライアンス学会共催
 テーマ「体罰問題と学校・教職員」
 I 問題提起「体罰と懲戒処分」
 講師 坂田 仰氏（教職教育開発センター教授）

II パネルディスカッション

- 講師 澤田哲夫氏（川口市立元郷小学校校長）
講師 杉山洋一氏（静岡県立静岡西高等学校校長）
講師 山口卓男氏（筑波アカデミア法律事務所代表弁護士）
講師 河内祥子氏（福岡教育大学准教授）
講師 山田知代氏（東京女学館大学専任講師・総合研究所客員研究員）
講師 黒木幸博氏（宮崎県立都城さくら聴覚支援学校）
講師 奥田光明氏（函館市立港小学校）
- 21日 研究課題 55 公開研究会開催
テーマ「[「みどりの家」前史—社会福祉学科における戦後の地域活動の展開]」
講師 吉澤英子氏（大正大学名誉教授）
- 22日 研究課題 49 公開研究会開催
テーマ「西生田キャンパスの森の再生 里山の保全作業（下刈り、落ち葉掃き）」
- 26日 研究課題 51 ワークショップ開催
テーマ「こころと体のリフレッシュ—呼吸法を使って」
講師 桜井育子氏（カウンセリングセンター教諭）
- 3月 3日 研究課題 50 第1回ラオス訪問調査公開報告会開催
テーマ「生活支援のための教材及び指導法の開発に向けて」
講師 天野晴子氏（家政経済学科教授）
講師 飯田文子氏（食物学科准教授）
講師 佐々井啓氏（被服学科教授）
講師 高増雅子氏（家政経済学科教授）
講師 川口えり子氏（JICA 途上国支援専門家、日本女子大学人間生活学研究科）
講師 高畑恒男氏（元 JICA ラオス事務所所長）
- 5日 研究課題 52 公開研究会開催
学生支援調査室共催
テーマ「学園アイデンティティに基づいた学生対応と心理的成長の査定」
講師 鶴養美昭氏（心理学科教授）
講師 北島歩美氏（カウンセリングセンター専任研究員准教授）
- 17日 研究課題 48 公開研究会開催
テーマ「イギリス・アメリカのジャポニズムときものの影響」
講師 太田茜（本学学術研究員）
講師 米今由希子（本学学術研究員）
講師 小野文子（信州大学准教授）
- 28日 「2013年度研究課題研究経過報告書」提出締切
- 31日 『日本女子大学総合研究所ニュース』（第25号）発行

2013 年度研究課題・研究員一覧

課題 番号	研究課題名	研究員 (○印：研究代表者)	客員研究員	研究期間
48	日本のきものが欧米の服飾に与えた影響—19世紀後半から20世紀前半中心に	○佐々井 啓 (被服) 大塚 美智子 (被服) 森 理恵 (被服) 〈3名〉	米今 由希子 滝澤 愛 佐藤 恭子 太田 茜 〈4名〉	2012.4.1 ~ 2015.3.31
49	西生田キャンパスの森の再生	○辻 誠治 (小) 今市 涼子 (物生) 田中 雅文 (教育) 宮崎 あかね (物生) 山田 陽子 (物生) 大塚 泰弘 (高校) 青木 ゆりか (高校) 林 直子 (高校) 中村 礼子 (中学) 大越 佳子 (中学) 森田 真 (中学) 勝地 美奈子 (小) 黒瀬 優子 (幼) 吉岡 しのぶ (幼) 〈14名〉	星野 義延 大河内 博 関口 文彦 〈3名〉	2012.4.1 ~ 2014.3.31
50	開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発	○天野 晴子 (家政経済) 佐々井 啓 (被服) 高増 雅子 (家政経済) 飯田 文子 (食物) 岩木 秀夫 (教育) 〈5名〉	小林 多寿子 望月 一枝 田中 俊子 川口 えり子 〈4名〉	2012.4.1 ~ 2015.3.31
51	平和を希求する社会貢献活動を一貫教育を通じて支援する組織作りの提言に向けての研究	○生野 聡 (小) 鶴養 美昭 (心理) 青木 みのり (心理) 北島 歩美 (カウンセリング) 小宮 恭子 (高校) 石井 直子 (高校) 柴田 笑美 (高校) 高橋 直紀 (高校) 山田 真里 (高校) 市川 美奈 (中学) 飯高 名保美 (中学) 國澤 恒久 (中学) 森田 真 (中学) 横山 萌絵美 (中学) 新井 理夏 (小) 桑原 正孝 (小) 山口 博子 (小) 稲場 愛子 (幼) 柳原 希未 (幼) 山品 敦子 (カウンセリング) 〈20名〉	杉森 長子 安藤 春美 牛山 通子 宮崎 礼子 呉 禮子 斉藤 令子 出淵 敬子 後藤 祥子 〈8名〉	2012.4.1 ~ 2014.3.31

課題 番号	研究課題名	研究員 (○印：研究代表者)	客員研究員	研究期間
52	平和な国際社会のリーダーを育成する自己実現支援体制と学園アイデンティティの確立	○北島 歩美 (カウンセリング) 鶴養 美昭 (心理) 青木 みのり (心理) 石黒 格 (心理) 小宮 恭子 (中高相談室・高校) (5名)	(0名)	2012.4.1～2015.3.31
53	教職志望学生、教職に就いている卒業生に対する力量向上に向けた支援実践	○坂田 仰 (教職) 愛木 豊彦 (教物) 峰村 勝弘 (教物) 赤池 由紀子 (教物) 柴田 笑美 (高校) 町 妙子 (中学) (6名)	久保 淑子 酒井 佳子 山田 知代 (3名)	2012.4.1～2014.3.31
54	大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み	○飯長 喜一郎 (心理) 田部 俊充 (教育) 加藤 美由紀 (教育) 小山 高正 (心理) 久東 光代 (心理) 鶴養 美昭 (心理) 青木 みのり (心理) 田中 雅文 (教育) 藤田 武志 (教育) 久田 則夫 (社会福祉) 小山 聡子 (社会福祉) 黒岩 亮子 (社会福祉) 中西 裕二 (文化) 堀越 栄子 (家政経済) 葉袋 奈美子 (住居) 藤井 恵子 (食物) 星名 由美 (心理) (17名)	田島 光則 満田 高久 高橋 謙一 (3名)	2012.4.1～2015.3.31
55	家庭福祉センター「みどりの家」の歴史的考察と地域貢献の意義	○岩田 正美 (社会福祉) 黒岩 亮子 (社会福祉) 大澤 朋子 (社会福祉) (3名)	須之内 玲子 (1名)	2013.4.1～2016.3.31
56	日本女子大学における「放課後サポート」実施に向けての調査・研究	○篠原 眞澄 (小) 西村 陽平 (児童) 請川 滋大 (児童) 田部 俊充 (教育) 林 浩康 (社会福祉) 定行 まり子 (住居) 辻 誠治 (小) 川合 洋子 (小) 神山 智之 (小) 山邊 美沙子 (小) 永田 陽子 (幼) (11名)	岩崎 洋子 石山 正子 池本 美香 安藤 春美 (4名)	2013.4.1～2015.3.31

Ⅲ 2014年度 研究課題

2014年度は、公募の結果、新規に採択された3研究、継続の6研究、計9件の研究課題が活動する予定である。

【新規研究課題】

1. 研究課題 57 日本女子大学をかこむ歴史的空間の発展をたどる

【研究目的】

江戸時代の後期、日本女子大学の本部校地は、二軒の旗本屋敷であった。また不忍通りを隔てた体育館地区は農地、さらに弦巻川（現在は暗渠）を渡った先の学寮地区は、丘陵上を法明寺から本淨寺・護国寺に続く宗教的な空間の中にあった。江戸時代の日本女子大学の校地は、池袋から練馬に広がる農地と江戸城を中心に広がる江戸町との境目にあり、時代とともに大きくその景観と性格を変えていくのである。

そこで本研究計画では、校地に隣接する広域の「雑司ヶ谷」に注目し、地域が果たした歴史的な役割を踏まえながら、そのなかで新たに生まれた日本女子大学が地域にとっていかなる意味をもったのかを考えることにしたい。

研究は二年間を予定しており、その課題も大きく二つに分かれる。初年度は、江戸時代における「雑司ヶ谷」の信仰的な要素に焦点をあてる。鬼子母神堂は戦国時代から庶民の信心の拠り所としてあったが、この堂は法明寺や本淨寺、さらに今はその痕跡も失われた鼠山感應寺という法華宗（日蓮宗）に属する寺院群の中に位置し、弦巻川に沿って江戸町の庶民が参詣する信仰空間を構成していた。そこでこの信仰空間の広がり、その具体的な姿を明らかにしたい。第二年度の課題は、幕末・明治の変動期における「雑司ヶ谷」地の変容を追いながら、かつての旗本屋敷が大学校の敷地となり、教育が地域の性格を特徴付けるに至った過程をたどりたい。この流れのなかに日本女子大学校の創立もあるわけで、「雑司ヶ谷」という地域にとって、本学の発展は重要な意味をもったことに言及したい。

【研究組織】

研究員（代表者）永村 眞（史学科）
（分担者）三神 和子（英文学科）
村井 早苗（史学科）
井川 克彦（史学科）
吉良 芳恵（史学科）

	矢野 立子 (史学科)
客員研究者	岸本美香子 (成瀬記念館・学芸員)
	杉崎 友美 (成瀬記念館・学芸員)
	三田 一則 (豊島区教育委員会教育長)
	近江 正典 (法明寺住職)
	安藤 昌就 (池上本門寺霊宝殿主事)
	國分 眞史 (文の京地域文化インタープリター)
	市村 孝史 (文の京地域文化インタープリター)
	片山 妙子 (文の京地域文化インタープリター)

2. 研究課題 58 日本女子大学および卒業生組織桜楓会による 震災・復興時の社会貢献・支援活動に関する横断的研究

【研究目的】

今年は関東大震災から90年となる節目の年である。14万5千人もの死者・行方不明者を出した東京では、新聞は1ヶ月ほど発行不能となるなど首都機能そのものが停止した。日本女子大学も煉瓦造の校舎であったため関東大震災で多大な被害を受け、授業再開などに少なからぬ影響があった。その中で、日本女子大学は教職員・学生のべ約800名が東京市の調査に当たるという大規模な活動を行った。さらに本学卒業生組織「桜楓会」は東京府慈善協会と協力し、学生も参加して児童救護所を設置、託児や被服救護などを行い、女性の力を活かしたためざましい支援活動を行った。それには本学の卒業生が開設した託児所などでの震災前からの活動経験が大いに活かされている。このように関東大震災時には、社会的に弱い立場に置かれていた女性達が支援において大きな働きをしたことがいくつかの文献に散見されるが、これらの出版物では女性による支援の効果、本学の活動はあまり認識されていない。改めて本学で活動の原動力と成果をまとめ、災害後に発揮したリーダーシップと活動力について歴史をさかのぼって明らかにする必要がある。本学以外にも支援活動を行った女子大学があるかどうかなども調査し、客観的な調査結果を得るとともに、女性が当時の社会に果たした役割を確認したい。

またこれらの支援活動は、それ以後も地震災害のたびに、各支部・本部を中心として(一社)日本女子大学教育文化振興桜楓会(桜楓会と呼ぶ)が行った支援活動に受け継がれている。また本体である日本女子大学および附属校園が行ってきた活動は、最近の震災では東日本大震災が中心であるが、大学が被災地となった震災後・戦争時の支援、その後の活動をまとめることで、本学の特色の1つである「市民に近く、弱い立場の人々に寄り添う」活動が、大学と附属校園、卒業生の間でどのように行われてきたかを示すことの価値は大きい。

特に本研究は女性が地震災害時に発揮してきた「リーダーシップ」と「地域・社会貢献」の面に着目し、それらを歴史的に明らかにするとともに、学園での教育方針との関連をさぐる。そして、これからの首都直下地震や南海トラフ等での大地震に、どのように合理的かつ効果的な支援活動を行うかという方針を把握するための知見を得る。これら2つの柱を中心として、聞き取りや調査を

実施し、過去にさかのぼるだけでなく、これから起こりうる大地震や自然災害等について本学学生と卒業生がどのようにかわるか、将来の行動方針の模索を見据えた研究とするところに本研究の独自性をもたせる。

[研究組織]

研究員（代表者）平田 京子（住居学科）
（分担者）請川 滋大（児童学科）
飯田 文子（食物学科）
石川 孝重（住居学科）
増子 富美（被服学科）
伊ヶ崎大理（家政経済学科）
高増 雅子（家政経済学科）
清水 康行（日本文学科）
永田 典子（物質生物科学科）
黒岩 亮子（社会福祉学科）
客員研究員 後藤 祥子（桜楓会理事長、元・本学学長）
久保 淑子（日本女子大学名誉教授）
片桐 芳雄（日本女子大学名誉教授）
岸本美香子（成瀬記念館・学芸員）

3. 研究課題 59 西生田キャンパスの森の再生と保全

[研究目的]

本学の西生田キャンパスは1934（昭和9）年に目白キャンパスからの移転構想の下に始まった土地購入に始まる。現在の面積は293,800㎡である。

2003年度～2005年度に実施した総合研究所の研究課題25:「西生田キャンパスの森の保全と教育利用に関する基礎調査」により、キャンパス内に生育する植物の種類と森林群落の分類と広がりを明らかにし、この調査結果に基づいて、西生田キャンパスの森の回復・保全及び教育利用に関する基礎アイデアを提言した。

2006年度～2008年度に実施した総合研究所研究課題35:「西生田キャンパスの森の教育利用に関する研究と実践」および2009年度～2011年度の総合研究所研究課題44:「西生田キャンパスの森の保全に関する研究」では、キャンパスの森の大半を占めるコナラ林（コナラ・クヌギ群集）の下刈りと落ち葉掻きの再開による林床植生の回復過程と、絶滅危惧Ⅱ類植物のエビネ、キンラン、タマノカンアオイの保全についての研究を行った。また、森が周辺の大気・水環境に及ぼす影響についても研究を進めた。さらに、森のホームページの更新を図るとともに、幼稚園園児から大学生ままでの教育的実践活動についてもとりまとめた。

2012年度～2013年度の研究課題49:「西生田キャンパスの森の再生」では、上記の

研究を継続するとともに、「里山としての樹木更新のための伐期を大きく過ぎているキャンパスの森の再生」を中心的な目的とし取り組んできた。すでに更新予定地の高木、亜高木の伐採を完了し、コナラ、クヌギなど使用構成木の育苗も順調に進んでいる。更に現状のままでは近い将来に消失が予想される、キャンパス内にかつて広く生育していたアカマツ林の更新についても取り組みを始めたところである。

今回応募する研究課題は、再生と保全に息の長い活動が必要な西生田キャンパスの森について、上記 11 年間に積み重ねてきた研究と具体的作業に引き続き取り組んでいこうとするものである。

【研究組織】

研究員（代表者）辻 誠治（附属豊明小学校）
（分担者）今市 涼子（物質生物科学科）
田中 雅文（教育学科）
宮崎あかね（物質生物科学科）
山田 陽子（物質生物科学科）
大塚 泰弘（附属高等学校）
青木ゆりか（附属高等学校）
林 直子（附属高等学校）
中村 礼子（附属中学校）
大越 佳子（附属中学校）
森田 真（附属中学校）
勝地美奈子（附属豊明小学校）
黒瀬 優子（附属豊明幼稚園）
吉岡しのぶ（附属豊明幼稚園）
客員研究員 星野 義延（東京農工大学農学部准教授）
大河内 博（早稲田大学創造理工学部教授）
関口 文彦（日本女子大学名誉教授）

【継続研究課題】

研究課題 48 日本のきものが欧米の服飾に与えた影響 —19 世紀後半から 20 世紀前半中心に

【研究組織】

研究員（代表者）佐々井 啓（被服学科）
（分担者）大塚美智子（被服学科）
森 理恵（被服学科）
客員研究員 米今由希子（被服学科非常勤講師、本学学術研究員）
滝澤 愛（椋山女学園大学専任講師、被服学科非常勤講師）

佐藤 恭子（人間生活学研究科生活環境学専攻3年次）
太田 茜（被服学科非常勤助手、本学学術研究員）

2. 研究課題 50 開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発

〔研究組織〕

研究員（代表者）天野 晴子（家政経済学科）
（分担者）佐々井 啓（被服学科）
高増 雅子（家政経済学科）
飯田 文子（食物学科）
岩木 秀夫（教育学科）
客員研究員 小林多寿子（一橋大学社会学部教授）
望月 一枝（秋田大学教育文化学部教授）
田中 俊子（日本女子大学客員研究員）
川口えり子（JICA 途上国支援専門家、人間生活学研究科生活環境学専攻）

3. 研究課題 52 平和な国際社会のリーダーを育成する自己実現支援体制と 学園アイデンティティの確立

〔研究組織〕

研究員（代表者）北島 歩美（目白カウンセリングセンター）
（分担者）鶴養 美昭（心理学科）
青木みのり（心理学科、カウンセリングセンター所長）
石黒 格（心理学科）
小宮 恭子（中高相談室、附属高等学校）

4. 研究課題 54 大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み

〔研究組織〕

研究員（代表者）田部 俊充（教育学科）
（分担者）加藤美由紀（教育学科）
小山 高正（心理学科）
久東 光代（心理学科）
鶴養 美昭（心理学科）
青木みのり（心理学科）
田中 雅文（教育学科）
藤田 武志（教育学科）
久田 則夫（社会福祉学科）
小山 聡子（社会福祉学科）

黒岩 亮子 (社会福祉学科)
中西 裕二 (文化学科)
堀越 栄子 (家政経済学科)
葉袋奈美子 (住居学科)
藤井 恵子 (食物学科)
星名 由美 (心理学科)
客員研究員 飯長喜一郎 (元心理学科教授)
田島 光則 (総務課長)
満田 高久 (キャンパス計画室課長)
高橋 謙一 (西生田総務課課長)

5. 研究課題 55 家庭福祉センター「みどりの家」の歴史的考察と地域貢献の意義 [研究組織]

研究員 (代表者) 岩田 正美 (社会福祉学科)
(分担者) 黒岩 亮子 (社会福祉学科)
大澤 朋子 (社会福祉学科)
客員研究員 須之内玲子 (元社会福祉学科教員、元「みどりの家」専任職員)

6. 研究課題 56 日本女子大学における「放課後サポート」実施に向けての調査・研究 [研究組織]

研究員 (代表者) 篠原 眞澄 (附属豊明小学校)
(分担者) 西村 陽平 (児童学科)
請川 滋大 (児童学科)
田部 俊充 (教育学科)
林 浩康 (社会福祉学科)
定行まり子 (住居学科)
辻 誠治 (附属豊明小学校)
川合 洋子 (附属豊明小学校)
神山 智之 (附属豊明小学校)
山邊美沙子 (附属豊明小学校)
永田 陽子 (附属豊明小学校)
客員研究員 岩崎 洋子 (日本女子大学名誉教授)
石山 正子 (桜楓会常任理事)
池本 美香 (日本総研主任研究員)
安藤 春美 (附属豊明小学校)

IV 2014年度『日本女子大学叢書』採択報告

2014年度は、5件の応募があり、厳正な審査の結果、以下の2件を採択し、100万円を刊行助成することを決定いたしました。

2014年度

◇日本女子大学叢書 16

秋元健治（家政学部教授）

『原子力推進の現代史—原子力黎明期から福島第一原発事故まで—』

◇日本女子大学叢書 17

平館英子（文学部教授）

『悲別歌の意匠』

V 日本女子大学総合研究所 規則

(名称)

第1条 学校法人日本女子大学は、目白地区に日本女子大学総合研究所（以下「本研究所」という）を設置する。

(目的)

第2条 本研究所は、日本女子大学の建学の精神に基づき日本女子大学固有の研究の推進を図るとともに、日本女子大学を拠点とする学際的共同研究・調査を推進し、大学院、学部、附属校・園の研究および教育の充実、発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は、前条の目的を達成するため、つぎの事業を行う。

- (1) 創立者成瀬仁蔵に関する研究およびその推進
- (2) 日本女子大学一貫教育に関する研究およびその推進
- (3) 女子教育に関する研究およびその推進
- (4) 日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査の実施
- (5) 研究センターの認定
- (6) 『日本女子大学叢書』の刊行助成
- (7) 研究資料の保管および公開
- (8) 研究会・講演会・セミナー等の開催および助成
- (9) 研究・調査成果の発表・公刊
- (10) その他目的達成に必要な事業

(運営組織)

第4条 本研究所は、つぎの機関により運営する。

- (1) 所長 1名
- (2) 運営委員 若干名
- (3) 研究員 若干名
- (4) 認定委員 若干名
- (5) 客員研究員 若干名
- (6) 事務職員 若干名

(所長)

第5条 所長は、本研究所を代表し、事業および事務を統括する。

- 2 所長は、日本女子大学の教授のうちから学長が任命する。

- 3 所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 所長が欠けたとき、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

(研究員)

第6条 研究員は、日本女子大学専任教員および附属校・園教諭のうちから、運営委員会の審議を経て、所長が任命する。

- 2 研究員の募集は、研究課題と併せ公開で行うものとする。
- 3 研究員は、第3条第1号ないし第3号に規定する研究を行うものとする。
- 4 研究員は、3年以内に研究を完了し、報告しなければならない。ただし、第3条第1号第2号に関する研究は、3年を超える継続を認めることができる。

(客員研究員)

第7条 研究推進のために必要なとき、日本女子大学専任教員および附属校・園教諭以外の者を客員研究員として委嘱することができる。

- 2 客員研究員の委嘱・解任は、運営委員会の審議を経て、所長が行う。
- 3 客員研究員の業務は、委嘱の時に決定する。

(運営委員会の構成)

第8条 運営委員会は、学長、副学長、所長、常務理事、本研究所担当理事、日本女子大学教授のうちから学長が選任する若干名の委員、事務局長、学務部長、学務部事務部長を以て構成する。

- 2 学長が選任する委員の任期は2年とし、欠けたときの後任者の任期は前任者の残任期間とする。ただし、再任を妨げない。

(運営委員会の審議事項)

第9条 運営委員会は、本研究所の運営に関するつぎの事項を審議決定する。

- (1) 事業計画および運営の基本方針
- (2) 企画に関する重要事項
- (3) 第6条第1項第2項に規定する公募した研究課題および研究員の選考
- (4) 第7条第2項に規定する客員研究員の委嘱・解任に関すること
- (5) 予算および決算
- (6) 研究センターの認定
- (7) その他運営に関する事項

- 2 運営委員会は前項(6)については、別に定める認定委員会に審議を委任することができる。

(運営委員会の召集等)

第10条 所長は、運営委員会を召集し、議長として議事を整理する。

- 2 運営委員会は、研究員の出席を認め、意見を聴取することができる。

(事務処理)

第11条 本研究所の事務は、所長および学務部長の命により学務部研究支援課が行う。

(会計)

第12条 本研究所の会計は、学校法人日本女子大学に属し財務に関する諸規程の定めに従い処理

し、各年度の予算は、理事会の承認を得なければならない。

(発明または著作に関する権利)

第13条 本研究所における事業活動、調査等に基づく発明または著作に関する権利の帰属および利用については、別途定める。

(実施細則)

第14条 本規則の実施に関する必要事項は、別途細則で定める。

(規則の改廃)

第15条 本規則の改廃は、運営委員会の議決により、理事長が行う。

附 則

- 1 本規則は、平成7年4月1日から施行する。
- 2 施行初年度の所長の任期は、平成8年3月31日までとする。
- 3 日本女子大学附属児童研究所規約、日本女子大学附属農家生活研究所規約、日本女子大学女子教育研究所規約は、平成7年3月31日を以て廃止し、継続している研究は、本研究所に引き継ぐことができる。
- 4 当分の間、第8条の日本女子大学教授のうちから学長が選任する若干名の運営委員は、家政学部長、文学部長、人間社会学部長、理学部長とする。

附 則

本規則は、平成8年4月1日から一部改正施行する。

附 則

この規則は、平成14年1月30日から施行する。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成20年4月1日から施行する。

附 則 (事業の一部変更に伴う改正)

この規則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則 (役職の一部変更に伴う改正)

この規則は、平成24年4月1日から施行する。

VI 日本女子大学総合研究所 研究内規

(目的)

第1条 この内規は、日本女子大学総合研究所設置の目的に沿って、研究課題および研究員を公募し、研究を推進する上での必要事項を定める。

(募集対象)

第2条 研究課題は、「日本女子大学総合研究所規則」第3条に規定する次の研究の範囲とする。

- (1) 創立者成瀬仁蔵に関する研究
- (2) 日本女子大学一貫教育に関する研究
- (3) 女子教育に関する研究
- (4) 日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査

2 研究員は、大学の専任教員および附属校・園教諭のうち、前項の研究課題を原則として共同（客員研究員を含む）で行うものとする。なお、研究員のうちから研究代表者を定めるものとする。

ただし、研究開始時の客員研究員の人数は、研究員の5割を超えないことを原則とする。

(募集件数)

第3条 募集件数は、運営委員会が募集年度ごとに決定する。

(申請手続)

第4条 研究課題および研究員の公募は、前年度6月に行う。なお、12月に再募集する場合がある。

2 研究を希望する者は、研究を開始しようとする前年度の9月末日までに、研究計画書等所定の書類を整えて総合研究所長に提出しなければならない。

3 2年以上にわたる継続課題にあっても、年度ごとに申請手続を行うものとする。

(決定)

第5条 研究課題および研究員は、提出された研究計画書に基づいて運営委員会での選考の上決定し、その結果は申請者に通知する。

(研究期間)

第6条 研究期間は、一研究課題につき、原則として3年以内とする。

2 第2条第1号および第2号に関する研究は、3年を超える継続を認めることができる。ただし、その場合には改めて継続の申請手続を行うものとする。

(研究費)

第7条 研究費は、運営委員会が募集年度ごとに、研究所総予算の範囲内で交付額の上限を決定する。

2 研究費は、研究活動に必要と認められる範囲で、次の費目に該当する場合に使用することが

できる。

- (1) アルバイト雇用費（人件費）
- (2) 用品費
- (3) 消耗品費
- (4) 通信運搬費
- (5) 印刷製本費
- (6) 旅費交通費
- (7) 修繕費（備品）
- (8) 委託費
- (9) 賃借料
- (10) 支払手数料
- (11) 会合費
- (12) 購読費
- (13) 接待渉外費
- (14) 諸会費
- (15) 雑費
- (16) 教育研究用機器備品
- (17) 図書

3 研究費の支出は、大学関係研究費の支出取扱いに準じて総合研究所事務室が業務を執り行う。
（研究経過の報告）

第8条 研究経過は、各年度ごとに所定の研究経過報告書を総合研究所長に提出しなければならない。

2 提出された研究経過報告書は、日本女子大学総合研究所ホームページに発表する。
（研究成果の発表）

第9条 研究成果は、研究期間の終了の時点で、『日本女子大学総合研究所紀要』に発表するものとする。

2 研究成果は、『日本女子大学叢書』として総合研究所が刊行助成する場合がある。
（物件の管理・帰属）

第10条 研究費で購入した図書および用品・機器備品は、総合研究所の帰属とし、研究終了後は原則として総合研究所に返却しなければならない。

（内規の改廃）

第11条 本内規の改廃は、運営委員会の議決により行う。

附 則

1 この内規は、平成7年6月2日から施行する。

2 第4条の申請手続は、平成7年度に公募する平成7年度および平成8年度より研究を開始する研究課題については、別に定める。

3 第6条の研究期間は、平成7年度より研究を開始する研究課題については、初年度の研究期間が1年に満たなくても、これを1年として数える。

4 この内規は、平成17年4月1日から施行する。

5 この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附則（募集対象の一部変更に伴う改正）

この内規は、平成23年4月1日から施行する。

附則（申請手続の一部変更に伴う改正）

この内規は、平成25年4月1日から施行する。

Ⅶ 日本女子大学総合研究所 研究センター認定内規

(目的)

第1条 この内規は日本女子大学総合研究所設置の目的に沿って、研究センターを認定する上で
の必要事項を定める。

(研究センター認定要件)

第2条 研究センターの認定は以下の要件をすべて満たしたものについて行う。

- (1) 研究センターはその研究内容が日本女子大学の建学精神、理念、あるいは総合研究所の趣旨
に則したものであること。
- (2) 研究内容の独自性・先進性、社会的要請と社会貢献などが研究計画・活動方針に織り込まれ
ているものであること。
- (3) 公的研究費（助成金等）の確保の見通しのあるもの。
- (4) 研究センターの代表者は日本女子大学教員であること。またその構成員は原則10名以上で、
かつ複数の本学教員を含むことなど、研究センターに相応しい規模と研究体制であること。
- (5) 研究期間は原則として3年以上とし、継続性のあるもの。

(申請手続き)

第3条 研究センターの認定を希望する者は、総合研究所の定める書類を所長に提出する。

(決定)

第4条 認定委員会の決定に当たっては、提出された書類と必要に応じてヒアリングを行う。認
定結果は速やかに運営委員会、申請者に報告する。

(認定委員会構成)

第5条 認定委員会の構成は運営委員会構成員若干名および所長が運営委員会の議決を経て専門
委員に委嘱する本学教員で構成する。

(認定の取り消し)

第6条 研究センターの研究活動が著しく低下したり、申請内容の目的から逸脱したと認められ
る場合には、運営委員会は認定を取り消すことができる。

(研究センター活動報告)

第7条 研究センターは各年度に所定の研究活動報告書を所長に提出するものとする。

(内規の改廃)

第8条 本内規の改廃は運営委員会の議決を経て学長が行う。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

VIII 2015年度総合研究所『日本女子大学叢書』応募規程

総合研究所では、2005年度より、『日本女子大学叢書』を刊行しております。研究成果をお持ちの本学園教職員（個人あるいはグループ）で、同叢書として刊行することを希望される方は、下記の応募要領に従い奮ってご応募下さい。なお、総合研究所の研究課題に採用されたグループも応募の対象と致します。

[応募規定]

原則として応募時ならびに出版時に本学専任教職員であること。

[刊行助成の範囲]

1 件の採用に対し、100万円を上限とし、原則として年に2件まで刊行の助成をする。

ただし、厳正な審査の結果、採択にふさわしい研究がない場合は、刊行を見送る。

[刊行助成の対象領域]

1. 本学固有の研究
2. その他の自然科学、社会科学、人文科学の研究、および学際的な研究

[審査基準]

研究内容は、以下のいずれかに該当する研究であることが審査においては重視されることを留意されたい。

1. 本学固有の研究に関する新たな展開を示す内容であること。
2. 当該領域の研究史及び研究状況をふまえ、その領域で新しい地平を開拓する内容であること。
3. 新しい研究領域・新しい研究方法を切り拓く問題提起的な内容であること。
4. 研究上有益な資料を発掘し、意味づけている内容であること。
5. 研究の発展に貢献すると見なすことができる内容であること。

[応募条件・申し込み先]

応募に際しては、刷り上がりが、おおよそ250頁以上（A5版）であることを目安にし、完成原稿3部と、1000字程度の日本語による要約10部を付けて、総合研究所宛申し込むこと。原稿のタイトルにはふりがなをつけること。

なお、本刊行助成に申請した研究内容と同一内容で、他機関の刊行助成にも応募した（する）場合は、その旨を明記すること。

また、刊行は、2016年3月末日迄に完了すること。

[応募の締切り]

応募の締切りは、2014年9月末日とする。

[刊行助成の採否]

刊行助成の採否は、『日本女子大学叢書』刊行委員会において、学内外の専門家を加えた審査を経て決定する。その際、応募者に対して、客観的な立場を取り得る委員が担当することとする。刊行に際しては、叢書としての統一性をはかるために、応募者に加筆・訂正を依頼する場合もある。採否については、6ヵ月以内に応募者に通知をし、各教授会にも報告することとする。

※詳細は、総合研究所事務室（内線 3277）にお問い合わせください。

IX 2013年度総合研究所組織

所 長	三神 和子	
運営委員	所長	三神 和子
	学長	佐藤 和人
	副学長	真橋美智子
	常務理事	若林 元 (～2013年12月10日)
	家政学部長	石川 孝重
	文学部長	永村 眞
	人間社会学部長・担当理事	山田 忠彰
	理学部長	今市 涼子
	事務局長	篠田 怜子
	学務部長	今井 元
	学務部事務部長	中澤 雅之 (～2013年6月30日)
		高石 淳子 (2013年7月1日～)
研究員	II 2013年度研究課題・研究員一覧の項に掲載	
客員研究員	同 上	
事務職員	研究支援課長	河村 宗昭
非常勤研究員		橋本のぞみ
		鴨川 都美 (～2013年12月31日)
		郡 真木子
		壬生 里巳 (2014年1月8日～)

日本女子大学総合研究所ニュース No.25 (2014)

2014 (平成26) 年3月31日

発行人 三神 和子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

電話 03-5981-3277 (直通・FAX)

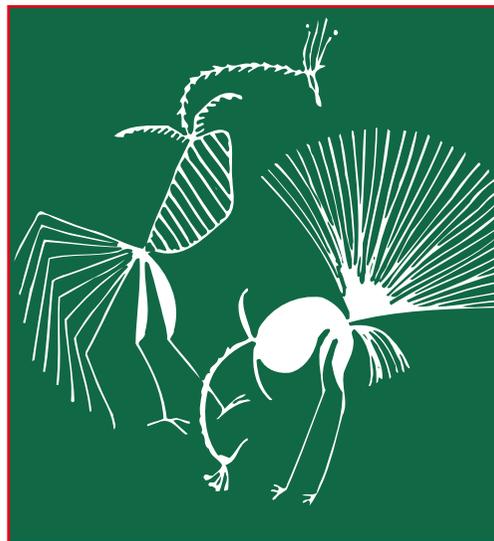
印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6-13-20

電話 03-5947-9135

Newsletter
of
The Research Institute
of
Japan Women's University

No.25



March 2014